

保育学文献賞を受賞して

「障害」のある息子との日々を楽しむ

徳田 茂

思いもかけぬ幸福

人生には、ごくまれに、思いもかけない幸福な時というものがある。今度の保育学文献賞の受賞は、まさにそのようなものであった。

ダウン症で知的「障害」をもつ長男・知行ともゆきとの二十年間の歩みを、私は一冊の本にしていたいだいた。それも、大学で心理学を学んでいた頃からよく知っ

ていた川島書店の手によって、である。これだけでもう、私は大いに満ち足りていた。二十年余りずっとため込んでいたものを思い切り放出した、という心地よさもあった。

本のタイトルは、四転五転したあと、結局『知行とともに——ダウン症児の父親の記』（川島書店一九九四）となった。単純といえば単純なタイトルであるが、私はこのタイトルが気に入った。

職場の仲間が中心になって「出版を祝う会」を開いてくれ、百名近い人たちが集まってくれた。病気のため入院していた、知行の祖母（妻の母親・私にとっては義母）もこの会に出席のため、病院からかけつけた。この人がいなかったら、私たちの二十一年間はなかった、と言っても過言ではない。その義母が大勢の人たちのなかでうれしそうな顔をしているのを見て私は、少しは恩返しができたかもしれないと思った。

右のようなことだけで、私は十分に満足していた。ところが、である。ある日突然、保育学会の事務局から「受賞」の知らせがあった。舞い上がった私は、正確な賞の名称も確認しないまま受話器を置いた。「よくわからないけど、保育学会から賞をもらえるらしい」と言うと、それだけで職場の仲間は喜んでくれた。おたがい、いい加減なものである。でも、そんな雰囲気って、わかっただけで思っただけ……。。

ともかく、びっくりしたし、うれしかった。自分なりに精一杯書いたとは言え、それがほかの人たちに認めていただけるかどうかは、また別の話だと思っていたから、今回の受賞は、私には格別の励ましとなった。

学力とは無縁のところ

ところで当の知行であるが、彼は本の出版の時も受賞の時も淡々としたもので、「それがどうした？」と言わんばかりである。私の浮かれ気分などに少しも左右されることなく、知行はいつものペースでのんびりとした日々を送っている。

知行は今二十二歳だが、ことばはほとんど喋らない。よほど必要だと思った時以外は、口をきかない。そもそも喋りことばをほとんど持っていないのである。必要な時は、一つ二つの単語を口にすればいい。日常的にはだいたいそれでいけるのである。

彼は、いわゆる学力というものは、ほとんど無縁である。読める字はたいへんに少ない。書ける字はもっと少ない。と言うより、自力で書けるのは、「とくだともゆき」と「CHECKERS」と「光GENJI」くらいのものである。あとの字には、そもそも関心が向かないのかもしれない。計算の方も、からっきしだめである。「一プラス一は？」と問われても、彼は、「困ったなあ」という顔をするばかりである。

こんな風にしてできないことをあげていくと、紙がどれだけあっても足りないほどだ。しかし、彼は平然としている。悠々としている。

読み書きができなかったり計算ができなかったりしたのでは日常生活ができない、と考えるのは、誤りである。ひょっとしたら、今の学校教育は、「学力、学力」と叫びながら子どもたちの心を殺しているのではないか。学力（それも受験の学力）がないと人として生きていけないように思わせて、子ども

ばかりでなく、親の心までも殺しているのではないか。学力とは無縁の生活を送ってきて、今のんびりと自分らしく生きていく知行を見てみると、つくづく今の学校教育が奇異なものに見えてくる。

では彼はどんな日々を送っているのか、その一端を紹介しよう。

彼は現在、私と同じ職場で働いている。ひまわり教室という、心身障害児の通園施設である。通ってくる子どもは、大半が学齢前の子で、「障害」の種類も程度もさまざまである。今は十一名の子が通っている。

わが家は松任市まつとうという、人口七万人足らずの小さな町にある。ひまわり教室は金沢市にある。彼は毎朝、松任市にあるわが家から金沢のひまわり教室まで、一人で通っている。「字も読めず、計算もできないのに!？」と思う人がいるかもしれないが、実際に知行は毎日通っている。それも、松任駅から金沢駅まではJRの電車に乗り、金沢駅からひまわり教

室のある十一屋町までは市内バスに乗って通っている。JRは回数券、市内バスは定期券である。彼は抽象的なことは苦手だが、具体的なことはなかなか強い。最初は私がいっしょに電車やバスに乗って教えた。その間いろいろ細かい手順を踏んだのだが、それは省略する。ともかく彼は、具体的な体験の中で自分のすべきことを覚えていった。

そこまでできるということは字が読めているのではないか、と思う人がいるかもしれない。私もそう思ったことがある。しかし、どうもそうではないらしい。ある日、知行が家を出るのが遅くなってしまった。そうなるのとたんに、知行の行動にずれが生じる。いつものホームに入ってきた電車に乗ったところ、それは逆方向へ向かう電車であった。結局彼は福井県の方まで行ってしまった。幸い、福井県の武生市で折り返す電車だったので、彼は無事松任駅まで戻ってこられたのであった。

このようなことは日々の暮らしのなかでちょこ

ちょこあって、私は字が読めない知行をかわいそうに思ったりするのだが、本人は意外とケロリとしている。それを見ると、かわいそうと思うのは親の勝手な感傷なのかもしれないと思ってしまふ。

仕事から帰ってくるのがけっこう遅い（七時頃）ので、食事をしたあとは、自分の部屋へ入って好きな歌手のCDを聴いて過ごしている。その音量があまりに大きい時は、近所への気兼ねもあって、音をしぼるように言うのだが、この時の知行の不満な顔、さぞかし私のことを「うるさい親父だ」と思っていることだろう。

日によっては、食後みんなといっしょにテレビを見て過ごすこともある。番組の中では洋画劇場が大好きで、とりわけハードアクションものが気に入っている。日頃の人づき合いはけっこう穏やかな知行が、こと映画になるとまるで人が違って、かなり激しい暴力シーンにも目をそむけずに見ているのを見ると、なんとなく不思議な気がする。その一方で、

案外人間ってこんなものかもしれない、とも思う。最近は見られなくなったが、ひと頃は知行自身もピストル（もちろんおもちゃの）を構えてテレビを見ていた。主人公がやられそうになると援護射撃をするためである。

こんな具合にして、知行の日々はのんびりと過ぎていく。私たちの目からすると現実と非現実の壁がないのかな？などと思うようなことも時折あるが、それがなんとも知行らしくて、私はうれしくなってしまうのである。

好きこそものの……

人間、好きなことや好きなものがあるということ、なんと素晴らしいことであろうか。知行といっしょに暮らしていると、そのことを痛感する。

その子が「障害」を持つ持たないに関わりなく、子どもが好きなものや好きなことを持つことは、と

ても大切なことであり、その手伝いをするのは、大人の仕事の中でも最も重要なことのひとつではないだろうか。知行と生きてきて二十二年余り、私はますますその思いを強くしている。

たとえば、こんなことがある。

彼はコーラが大好きである。そのことがあって、彼は百円玉一個と十円玉一個でコーラが買えることを覚えた。それは、コーヒーやジュースにも広がっていった。百円玉を二個入れればおつりがくることも覚えた。

彼はまた、ギターやピストルの雑誌が好きである。それらはいよいよ五百円前後のものであるが、千円札一枚を出せばそれらの雑誌を買えることを、知行は覚えていった。

はじめ、私たちが手本を示した。そして少しずつ彼にも経験させた。百円プラス十円が百十円であることを教えようとしても、知行は拒否しただろう。そう思ったから、私たちは、あくまでも具体的に、

生活の中で、モデルを示したり実際にさせてみたりした。このやり方は知行にはよかったようで、けっこう意欲的に挑戦し、そして力をつけていった。

銭湯へ入るためには百円玉三個と十円玉一個が必要なこと、時々乗って帰るバスの料金が「百円玉三個と十円玉三個」であることも、いつの間にか覚えてた。

彼はまた、五人分の缶コーヒーを買うすべも発見した。なんと彼は、百円玉一個と十円玉一個の山を五つ作ったのである。その金をまとめて買いにかけた。これには心底感動した。ちなみに、その日五人分の缶コーヒーを買いにかけたのは、お客さんが来ていたのを見て、お客さんと家族におごろうと思いついたことであつた。こんなことを思いつく知行に、私はホレホレするのである。

知行はキョンシーが大好きである。どうも彼はキョンシーがこの世に実在していると思つているよである。キョンシーが大好きな知行は、その映画

のビデオを見たい一心で、レンタルビデオ店からビデオテープを借りることを覚えた。今ではごく当たり前の顔をして、カードを持って借りにでかける。たまに返し忘れて、延滞金を七千円も払わなければならぬということもあつたりしたが、これも愛嬌である。

感謝しながら、日々を楽しむ

『知行とともに』にも書いたが、二十余年前に彼がダウン症だとわかった時、私は激しく絶望し、自分の人生はもう終了だ、と思つてしまった。大学の頃から「障害」児の施設に出入りし、卒業とともに「障害」児施設の職員として働いていた私は、「自分」は「障害」者の理解者であるか、と思ひ込んでいた。その私が、である。

まさか自分の中にそのような醜い差別心があるなどとは、思つてもみなかった。それだけにショック

だった。意識の上では理解者、無意識の世界では醜い差別者。この驚くべき矛盾。

それから、私の闘いが始まった。自分自身との闘いである。すぐには変わることはできなかったが、少しずつ私は変わってこられたように思う。それは、ほかでもない知行のおかげである。今は、知行という素晴らしい青年の父親であることに深く感謝している。私は無神論者であるので、神に感謝するということにはならないが、しかし、知行という子を授けてもらったことについては、目には見えない何かしら大きなものに対して、深く感謝する。

もちろん、知行とのつき合いがいつもいつも順調というわけではなかったし、今でもそれは変わらないう。また、知行と生きてくることは、私にとって、まわりとの闘いでもあった。それは並みの闘いではなかった。その闘いは、私をして、「障害」児だから不幸なのではない。「障害」を理由に差別する人々の中で生きていかなければならないことこそ

が、「障害」児の不幸なのだ」と確信させるほどのものであった。

しかし私は、そうしたこともすべて含めて、知行とともに生きてこられたことに、それを通して自分が少しましな人間になれたことに感謝している。

よく「子育て」とか「人を育てる」とか言われるが、その内実は、「ともに育つ」ということなのではなかるるか。親子について言えば、「親育ち、子育ち」ということではないだろうか。実は知行の下に妹と弟がいるが、この子らとのつき合いを通して、私はたくさん教えられ、学んだ。そして、育ててもらった。大人が一方的に子どもを育てる、親が一方的に子どもを育てるということは、ほんとうではないのではないか。わが子三人との日々を振り返って、つくづくそう思うのである。

幸いなことに、知行と生きてきた二十余年の間に、世界的に「障害」者理解の気運が高まり、また

私たちのまわりでもずいぶん様子が変わった。息がしやすくなったし、肩ひじをはらなくてもいいようになった。金沢市や松任市などで、私たちのあとに、百組を越える「障害」児の親子が地域の小学校へ通い、けっこうおもしろい暮らしを展開している。もちろん、トラブルはしょっちゅうある。ある意味では好ましいことだと思っている。ぶつかり合っている、悩み合いながら、人と人はわかり合い、育ち合っているから。

いつの間にか二十年余りもたってしまった。か細くて折れてしまいそうな知行が、今ではまるまるとしたアンコ型の体をゆすって歩くようになった。体とともに（?!）心も大きく成長した。味のある青年になったな、と思う。しっかり自分を持っていて、ゆったりとしたベースで生きている。なかなかユーモアもある。そんな彼との暮らしが、私には楽しくてたまらない。

これからも彼を人生の同行者として、のんびり楽

しくやっていきたいものである。もっとも、知行の方は「うるさい親だ」と思っているかもしれないので、あまり彼に迷惑をかけないようにしなければ、とは思っているのだが。

（ひまわり教室）

